

岡本かの子「金魚撩乱」成立考

外村 彰

一、はじめに

岡本かの子の兄で、天折した大貫晶川の小説「二人の生ひ立ち」(『新思潮』第二次第三号 明治四十三・十一・一)には、晶川とかの子の分身らしき兄妹が描かれている。このなかで、十五歳の退吉に妹のお妙が、「金魚」の標題をもつ一枚の作文を渡す場面がある(三二頁)。かの子は晶川より二歳下なので、この話が事実をもとに書かれていたとすれば、十三歳頃のかの子が、金魚についての記事を作っていたことになる。

残念ながら退吉は「金魚」を手にしても、涙で文章を読めず、その内容がどのようなものをかわれわれにつたえてはくれない。しかし、妹の作文題から、かの子が子どもの頃から金魚に愛着を示し、それを材にした作品を著そうとしていたらしく推される。ひるがえって昭和八年六月十一日の息子・太郎への手紙をみると、この時かの子(当時四十四歳)が金魚(雌雄のキャリコ)を

飼っていたことがわかる。太郎の註解には「後日小説『金魚撩乱』が書かれたのも、この時代に芽生えたテーマが実を結んだのであらう」とある(『母の手紙』婦女界社、昭和十六・十二・二十、一二〇—一二二頁)。

だが、昭和十二年『中央公論』十月号に発表された「金魚撩乱」の「テーマ」は、少なくとも小説発表の九年前に胚胎していたようだ。というのは、後に詳述するように、「金魚撩乱」はかの子が昭和三年『読売新聞』(九・四—十・二)に連載していた「新神秘主義」のなかの一篇「大仏と小仏師」の構想を發展させて成立したと考えられるからである。

ちなみに「新神秘主義」とは七つの靈験説話に解説風エッセイ「新神秘主義について」を付した総題である。七番めの「大仏と小仏師」を除く六篇の原話は共通して「宇治拾遺物語」に収められている。

各話の原拠は以下の通りになる。

「くう介供養」——卷九第四話「クウスケガ供養事」

「奇跡」

——卷一第十六話「尼地藏奉^レ見事」

「世に無駄事無し」

——卷四第十七話「慈恵僧正戒壇築^ル

事

「藁一すじ」

——卷七第五話「長谷寺參籠」男預^二利

生^一事

「碁打ち羅漢」

——卷十二第一話「達磨見^ル天竺僧^一行

事

「瀧瀨城」

——卷十三第十話「慈覚大師入^ル瀧瀨城

事

肝心の「大仏と小仏師」の原典だが、管見では日本の説話文学に該当する話がなかったため、おそらくこの作のみかの子の創作であった可能性が高い。⁽¹⁾この点は今後の研究により明らかにされてゆくべきであろう。

これまでの研究では、「金魚撩乱」に「摩訶女経」の靈験譚との類似を求めた、大矢武師「岡本かの子論」(『明治大正文学研究』第一〇号、昭和二十八・五・十。七九—八六頁)だけに、靈験譚と「金魚撩乱」をつなげた例がみられた。しかしこの説は「うらがえし的構成」という憶測にとどまっており、靈験譚「大仏と小仏師」と「金魚撩乱」との関係性は、現在まで論じられたことがなかった。

そこで、これから主に「大仏と小仏師」との比較をとおして、「金魚撩乱」の成立とその背景を、かの子の仏教観とも関連づけながら考察してゆきたい。

二、「大仏と小仏師」と「金魚撩乱」

「大仏と小仏師」は四百字詰原稿用紙にして七枚程の掌編であり、一方の同じ作者による「金魚撩乱」は九十一枚強(定稿現存)の短編である。全集等で両作を読み比べれば、その類似性は容易に指摘できるのだが、ここでは「大仏と小仏師」の内容に照応する「金魚撩乱」の箇所を拾いだすことにする。

両作に共通する要旨は、次のようになる。すなわち、自分のであつた美をわが力でも作り出そうと誓つた主人公が、ただそれだけにその後の人生を費やす。しかし十数年かかっても、その男の作は彼の目標の美を得ない。男は自分の創作能力に絶望してしまふ。だがその後、彼の眼前に理想の美が現れたのを認める、という筋だてである。

「大仏と小仏師」は新聞連載分にあわせて、三章にわけられている。「金魚撩乱」には明確な章立てはない(時間の経過を示す行空白はある)が、中間部に舞台移動がみられることから、便宜上三部構成とみなすこともできよう。以下、「大仏と小仏師」と「金魚撩乱」との構想・叙述面からの比較を(1)——(4)に分けて述べたい。

(1)「大仏と小仏師」第一章前半と「金魚撩乱」冒頭

「大仏と小仏師」は奈良時代の話である。第一章の前半三分の

二にあたる箇所をみると、はじめに完成に近づいた東大寺の大仏の噂、威容、由来が説明され、これに対比されたかたちで主人公の小仏師が描かれる。ここで彼はひとり仏頭作りにとりくみ続けながら、大仏の事業に参与しようとしなかつたのを悔いていた。

「金魚撩乱」はかなり時代が下り、大正から昭和の頃の東京を主な舞台にした話になるが、冒頭部をみると、崖上の邸で豊かな身体を日光浴させてくつろぐ美女・真佐子の「幸福そのもの」の図^四が描出されている。その様子はどこか大仏との照応をうかがわせる。

崖下に住む主人公の金魚商・復一は、真佐子に「嫉妬か羨望か未練か」をかきたてないと、「心が動きも止りもしない」心境でいる。彼はかつて真佐子が三人の青年と交際していた時も、片意地をはってその仲間に入らず、それを不如意に感じていた。

小仏師は自分の仏頭づくりをやめるのは「本能を抉り捨てるよりのなほ難い」と思っている。彼は「風のやうな心」のまま、鑿に力をこめるが、「また一つやり損つて」しまう。失敗もこれで百二十四度目だという。

冒頭部での復一は、真佐子を「運命的に思ひ切れない」と思っている。「頑になつた心」になっている彼は、拡大鏡でその年生まれた金魚を眺める。しかし「今年もまた望み通りの金魚は遂に出来さうもない」と嘆息している。彼が新魚造りを始めて六年目である。

こうしてみると、「大仏と小仏師」第一章の前半は「金魚撩乱」

冒頭部と類似した状況が描かれているといえよう。主人公は話のはじまった時点で、自分のとりくむ仕事にまだ成就をみないでおり、いっぽうすでに満足を得た状態に近い段階にあるものが対照的におかれている。それで主人公は、そのものに親しめなかつた悔恨を抱きつつ、自分の業めいた仕事にとりくむ。しかしこゝでも、彼はまた失敗をひとつ重ねるのである。

(2)「大仏と小仏師」第一章後半と「金魚撩乱」第一・二部

「大仏と小仏師」第一章後半三分の一になると、時間は過去に「フラッシュバック」し、ここでは、どういう経緯で小仏師が観音作りに没頭するようになったのかが説明されている。大工だった彼が夢殿の秘仏・救世観音像をみて、この世ならざる美を知り、その後修業して仏工となつたことが、主な内容である。なお、第一章は次の文で終わっている。

彼は一廉のものとなつた時、誓つて仕遂げる一つの仕事があつた。

「金魚撩乱」第一部をみると、冒頭部の後、おなじく時間は遡上して、復一と真佐子との青少年時代からのいきさつが語られる。そこでは真佐子が復一に花びらを浴びせたり、金魚の新種作りをすすめるといった出来事がある。第二部の関西での研究生活の間に、神秘的恋愛を抱いていた真佐子が別の男と結婚してしまう。

こうした事件・背景は「大仏と小仏師」にないが、復一は真佐子がわが手から遠ざかつたのを機に、彼女を彷彿させる新種の金

魚作りを決意するに到る。その折、つまり第二部の終わりにころには、以下のような彼の述懐がみられた。

すでに復一の心に或る覚悟が決つてゐた。(中略) 命を賭けてもやり切らうといふ覚悟だつた。

小仏師は救世観音像をみて、ただちに自分もあのような観音像を作ろうと決心している。復一の場合、小仏師よりも複雑な心理の階梯を経てはいるが、真佐子の影響により、新魚造りを発願するに至つてゐる。また、小仏師は他からの造仏の依頼を全てことわつていたが、復一も帰京後、鯉と鰻の養殖をたのまれて、「だめですな」と答えていた。両者の決意ぶりには共通性がみられる。こうしてみると、「大仏と小仏師」第一章後半は、「金魚撩乱」の冒頭部を除く第一・二部に相当していることがわかる。

おそらく作者がここまででもっとも苦心したのは、復一を生涯の仕事にどういふ必然性をもたせてとり組ませるか、にあつたのである。たとえ「非現実的な美女」であるにしても観音像と違い人間である真佐子を一目みて、復一が金魚作りによりの人生を賭けるというのは現実的でない。それで紙数を費やして、ドラマ性を付与させたため、「金魚撩乱」の第一・二部の分量が照応する「大仏と小仏師」の第一章後半よりもかなり膨らんだものと思われる。

このように、どういつた経緯で主人公が生涯の事業を心に期したかという点では、両作の構想は別様となつてゐる。この相違は、「大仏と小仏師」から「金魚撩乱」への改作過程において、新た

な創意の付与を顕著にうかがわせるところである。

(3) 「大仏と小仏師」第二章と「金魚撩乱」第三部前半

「大仏と小仏師」第二章は、次のようにはじまる。

この世の生甲斐には夢殿の救世観音に拮抗ふほどの仏一休を彫刻し度いものである。これが小仏師の唯一の願ひであつた。「金魚撩乱」第三部のはじめには、復一の以下のような同様の心境が述べられてゐる。

真佐子に似た撩乱の金魚を一びきでも創り出して、凱歌を奏したい。これこそ今、彼の人生に残つてゐる唯一の希望だ、

この後二人はおのれのめざす美の創出に没頭してゆくわけだが、両主人公の試行錯誤には興味深い共通項がうかがえる。小仏師は観音像の身体のを先に彫りあげる。しかし顔を彫る段になると、どうしても救世観音像に匹敵するまでに到れない。いっぽう復一は、真佐子の姿を蘭鑄に擬してゐた。蘭鑄の胸は、真佐子にふさわしかったが、顔は「獐猛」で、真佐子の器量にそぐわない。それで改良を試みるが、予想通りにはゆかないまなのである。小仏師は失敗をくりかえしながら心に観音を浮かべる。彼を落胆させ、同時に勇気づけもしたのは救世観音像だつた。復一も真佐子から、同様の心理的影響をうけている。小仏師の胸にうかがふ観音の慈顔は、復一が想起する真佐子と彼女が浴びせたまま心に貼りついた花びらを連想させる。そうして、小仏師の作る仏頭には「作意だけが眼につ」き、復一の交配させる金魚は「媚び過ぎ

て下品」なのであった。

小仏師も復一も、外部との接触を厭い、孤独にとじこもる。各々、救世観音像、真佐子の「美の压制」下でありつづけ、失敗を重ねてゆく。このように、「大仏と小仏師」第二章からは、「金魚撩乱」第三部前半との共通項がいくつか拾いだせるのである。

(4)「大仏と小仏師」第三章と「金魚撩乱」第三部後半

「大仏と小仏師」第三章のはじめには、小仏師の次のような動作があった。

小仏師は(中略)仰向けに倒れ、眼を洞にして天井を見て居た。(中略) けだるそうに起き上がった。

「金魚撩乱」冒頭部にも、復一に同じような動作の描写がある。復一は(中略)無表情のまま仰向けにどたりとねた。(中略)

むつくり起き上つて、煙草に火をつけた。

小仏師はここにきて、「いつの間にか張合つて来た」大仏の事業が成就される噂を耳にする。その事實は「彼を救しく」させている。これに照応するところは、復一が崖上の邸の真佐子の会話を聴こうとした折、真佐子が「非現実的な美女に気化して行くようで儂い哀感が沁々と湧く」のを感じる箇所であるうか。一見平凡そうな家庭生活を送りながらも、その趣味をパロックからより現実を遊離したロココへと変え、ますます中年となつても度を加える真佐子の美しさには、超現実へと向かう美の事業の完成が示唆されていると考えられるからである。

そしてとうとう、小仏師は自分の仕事に絶望して、仏頭を焼いてしまう。彼の心も同時に「空しくなる」。かたや復一は、たび重なる増水の結果、交配用の種金魚を失い、精根つきて意識を失っている。その後目覚めた時には、自然と一体化した「透明な観照体」になる。両者は結末の事件を前に、生涯を賭した事業の成功の夢がついたことを自覚している。その心境はそれまでの欲望が無と化した点で通底する。復一の場合、心身が無となって自然との融合につながり、恍惚感にひたっているが、こうした描写は、作者が次の団円への伏線として、「大仏と小仏師」よりもさらに劇的な描写を必要とした結果なされたのであろう。

なお、小仏師が仏頭を焼いたのも、復一が金魚を失つたのも、同じ秋である。小仏師は十二年、復一は十四年の間、ここまでに仏頭、金魚作りを続けている。

両作の結末の事件からも、類似性はうかがえるようである。復一は「初秋の太陽」にここで照らされているのに対し、小仏師の心には光が射している。この光明の直後、両者は自分の予想を超えた理想美を感得する。まず復一はそれまで失敗作として古池に「捨て餌」にしていた金魚同士の自然交配から、自分の予想だにしなければ名金魚を見出ししている。小仏師は、ただ光を感じただけで、「わたしの観音」を直観し、そのように叫んでいるだけだが、復一がであった理想魚が、執拗とさえ思える描写のなかで、真佐子を超える美をそなえていると書かれていたことから類推すると、小仏師の感取した観音は、救世観音像以上の美をあらわし

ていたものと察せられるのではないだろうか。

三、靈験小説「金魚撩乱」

「大仏と小仏師」と「金魚撩乱」との比較の結果、両作の構想・叙述には全体的な類似性がみられることが分かった。両作の構成はほぼ次のような照応関係にある。

「大仏と小仏師」

「金魚撩乱」

第一章前半

冒頭部

第一章後半

第一・二部

第二・三章

第三部

このことから、「大仏と小仏師」と「金魚撩乱」における小仏師と復一は、近似した人物像と考えられる。両者は自分の感得した美を、自ら創造し、超えようとする。その目的に没頭して、他は顧みない。そうして十年以上、失敗をくりかえす。結局ではついに小仏師と復一の生涯の業が否定され、その直後に両者の予期を超えた美が現れる。

その他にも、小仏師が彫り続ける仏頭は、復一が交配させる金魚に相当している。それまで執心してきた対象が、すべて失われて、主人公の意欲をなくさせて後、はじめて理想の姿をあらわすのは両作に共通した骨子だといえる。

さらに、「大仏と小仏師」の救世観音像と大仏の造営事業は、あわせて「金魚撩乱」の真佐子に投影されていた。「漂渺」とし

た、「天女型」の美女・真佐子には、さして現世への意欲がうかがえない。つまり人生を達観した神格者としての性格がうかがえるのである。その神格性は、復一以外の人には感取されていないが、これは小仏師だけが、秘仏の救世観音の美を見つけたことにつながっていると思われる。大仏の造営は、真佐子と彼女が住む崖上の邸を連想させるが、小仏師の大仏の事業への競争心は、復一の真佐子へのそれにもあてはまる。

以上のように、両作を比較してみた結果、復一は小仏師、金魚は仏頭、真佐子は救世観音像・大仏造営の発展であり、「大仏と小仏師」が「金魚撩乱」の原型であったことがうかがえた。おそらく、作者は、「金魚撩乱」を、靈験譚を下敷きにした、現代風の仏教文学として企図したのである。

ここで、前掲「新神秘主義について」と「観音靈験記新解釈」⁽²⁾から、作者の靈験記に対する解釈をみておきたい。「新神秘主義について」において、かの子は靈験を単なる迷信とせず、そこからは科学の解決できない「物心二元の交渉状態」の神秘を明らかにする「錬金術に似たアツトラクチャーな生命の更生術」がうかがえる、とみている。「歪められた人生」を「仏神の名による生命力」によって「金の如き人生」につくりかえる。その結果、「物心二元」は「一如」となれるのだという。人間界を超越した「聖能の存在」すなわち「神秘」を「直観」するのが、靈験の特性となる。この特性の再発見を、「新らしき神秘主義」とかの子は名づけた。

「観音靈驗記新解釈」でも、靈驗は「心身一如の境地に於いて宇宙生命の円滑なる靈智力を感得する時に起る所業」であり、これはいわゆる「靈感（インスピレーション）」とも換言できると解説されていた。

さてこうした観点から今一度靈驗譚を原型とした「金魚撩乱」を吟味してみると、わが力で美を創造しようと長く自分の「煩惱」にしばらく続け、絶望により「美の压制」からときはなれた復一は「物心一如」、つまり一種の悟りの境地に到り、そこで「聖能の存在」のもつ真の美を感得したという読みを可能にする。ここから作者の、小仏師・復一の生を描く意図が「煩惱」の「菩提」への転化とそれにとりまわす靈驗の直観という構想にあつたということが推察されてくるのである。

小仏師は観音そのものの姿を靈感で得たが、復一の感得した真の美、すなわち古池の名金魚は「どこか無限の彼方からその生を操られるような神秘的な動き」をしていた。「無限の彼方」の存在とは、靈驗をおこした存在を示唆する。小仏師は救世観音像をみて美の創造への「煩惱」をおこしたが、復一の場合、「半神半人」（かの子の遺作「富士」には「半神半人」が「自然には冥通ある超人」だが「純粹の神」でない、と書かれている）の真佐子への愛着心とともに、弁財天を喚喚していると考えられる琵琶湖の畔での研究生活が彼の「煩惱」発願の機縁となつていゝと思われ、ちなみに、遺作「女体開頭」から作者が日本の弁財天発祥の地を琵琶湖とみなしていたことが知られる。

以上のように、「金魚撩乱」は、「大仏と小仏師」の構想を基底として成立している。そこには、靈驗記の構造による「煩惱即菩提」の寓意性が存する。このことから「金魚撩乱」は、仏教思想の芸術的表現を企図した「新神秘主義」小説と作者に意識されていたと考えられるのである。

四、おわりに

かの子の初の本格評伝『芸術餓鬼 岡本かの子伝』（七曜社、昭和三十七・八・一）を書いた岩崎吳夫は、「観音靈驗記新解釈」にふれ、その靈驗観が「その後ついに小説としては表現されなかつた」とし、「おそらくいつかはかの子自身、一つの超現実的な物語としてユニークな文学を創造する腹案だつたのではなからうか」（一九六頁）と述べていた。

しかし、「大仏と小仏師」を書いた九年後に、この「腹案」は実現していた。さらにさかのぼって、「二人の生ひ立ち」の少女の作文をかの子自身の作と仮定する時、「金魚撩乱」の遠い「腹案」さえ想像される。

ともあれかの子は、そもそも次のような文学観をもっていた。

将来は仏教を形の上に持ち越した芸術の復興も必要であらう。

しかし仏教の形を一つもその中に見せずして、しかも仏教の理解と一致する芸術はなほ必要であらう。^(五)

昭和八年に端を發した「文芸復興」の機運にくみするなかで、

かの子がとらえた文学観には、このように「仏教復興」の意志が融合されていた。かの子が小説としては初めて、当時の有力誌「中央公論」に載せた自作「金魚撩乱」に内在する仏教思想はいわば「頓悟」すべきものであったろう。だが、その構想が靈験譚によったことは、たとえ理想魚の美を感じた復一の心に閃いた感慨、「意識して求める方向に求めるものを得ず、思ひ捨てて放擲した過去や思はぬ岐路から、突兀として与へられる人生の不思議さ」の一節からもあらためてうかがうことができよう。

以上、岡本かの子「金魚撩乱」の成立について、その原型が靈験譚「大仏と小仏師」とみられることを検証し、そこに「新神秘主義」思想の脈路の通じていることを考察した。「金魚撩乱」の成立と思想性については、なお続稿で考察を継続したいと考えている。そうして、岡本かの子の文学思想を、今後も仏教の神秘観の融解を視座として、作品の読解を中心にしながらあきらかにしてゆくことを課題としたい。

註

(一)「新神秘主義」の原拠には、他に次の例が挙げられる。

「奇跡」(延命地藏菩薩経直談鈔)巻十二第五十六話

「世に無駄事無し」(古事談)巻三第二百十五話／「古事談抜

書」七十話

「藁一寸じ」(今昔物語集)巻十六第二十八話／「古本説話集」

下巻五十八話／「雑談集」巻五／「御伽草紙」／

「大悦物語」／「日本昔話大成」

「碁打ち羅漢」(今昔物語集)巻四第九話／「宝物集」巻六／

「醒睡抄」巻三)

「額瀨城」(今昔物語集)巻十一第一話／「打聞集」十八話

／「私聚百因縁集」巻七第七話

原拠の比較にあたっては、今井みゑ子他編「宇治拾遺物語類話一覽」(『新日本古典文学体系42』岩波書店、平成二・一・二一・五一―九頁)を参照した。

なお、「くう介仏供養」は原話の前半部のみ、「額瀨城」は背景と人物の一部を下敷きにしている。また「額瀨城」からは、他の話が翻案なのに対し、作者の創造性がうかがえる。詳しい内容は割愛するが、主人公の額から仏神が現れる場面は、「宇治拾遺物語」巻一第十六話、巻九第二話にもあり、そこを作者が参考にしていたものと考えられる。

「宇治拾遺物語」の刊本は、管見では「新神秘主義」の書かれた昭和三年までに十二種ある。このうちかの子が読み、直接参照した可能性が最もあるのは、懇意にしていた与謝野寛・晶子が編集校訂に加わっていた、正宗敦夫編『日本古典全集 第二回 宇治拾遺物語』(日本古典全集刊行会、昭和二・一二・二五)であろうか。この刊行が機縁となり、半年後に「新神秘主義」が執筆されたと想像する。

(二)参考として、「大仏と小仏師」の原拠を推測しておきたい。中国の宋時代に成った、洪邁『夷堅誌』の補巻第二十四の第七話に

「観音」 という霊験説話がある。

内容を紹介しておく。海州の胸山賀氏は常日頃から身を清め、多数の観音の絵を描き、その技量は卓越していた。ある日皮膚のただれた乞食が現れ、手にした鱧の鯉の絵を描くよう頼んだ。その姿をみて忌み嫌う賀に、乞食は、まだあなたの描く観音は真を得ない、良い手本を示してあげようという。喜んで賀が入室させると、その者は荘厳な観音の姿に変じた。賀はこれを絵とし、さらに画名を高めた。

この話は『仏教大辞彙第二巻』（富山房、大正三・五・十八初版未見。昭和六・八・二十第九版所見）七七八頁の「魚籃観音」にも載っている。また、かの子の当時住んでいた青山高樹町の約六キロ先、現在の港区三田には、江戸三十三観音の一つである魚籃寺があり、青山とは市電で通じていた。観音信者のかの子がここに参詣し、この話を知っていたこともあり得る。

(三) 『観音経新法華経』（大東出版社、昭和九・十・十五）所収。

ここでかの子は、「壺坂寺霊験記」「今昔物語集」巻十六第二十話を意識している。

(四) 復一は「関西の大きな湖の岸」の「水産試験所」で金魚研究をしていた。このモデルは京都大学の天津臨湖実験所だと渡辺守順「近江文芸風土記」（滋賀県高等学校国語教育研究会『会誌』昭和三十六・十二・十。三三—三四頁）が指摘している。渡辺によれば「実験所には金魚の研究をしていた人はいない」らしい。

かの子は夫の岡本一平とともに琵琶湖を訪れていたようだ。か

の子の「取返し物語」の「前がき」から、比叡山から湖岸一帯を「彼方此方見めぐり」、源兵衛の「觸躰」の伝説を聴いていたことがわかる。また、一平の「琵琶湖めぐり」、『一平傑作集』磯部甲陽堂、大正十五・九・十五）五三八頁には「源兵衛の觸躰」があり、大空社の『一平全集第二十巻』の年譜によれば「琵琶湖めぐり」は大正七年（六・二十五—七・十二）に発表されている。臨湖実験所の創立は、『滋賀の文学地図』（サンブライト出版、昭和五十三・十一・一）一八四頁によれば大正三年である。大正七年頃にかの子が琵琶湖の実験所をみていたことはまちがいないと思われる。

(五) 「仏教と芸術」『国民仏教聖典』秀文閣書房、昭和九・四・八）四二頁。

補註

作品の引用は、冬樹社版『岡本かの子全集』によった。

(と)のむら・あきら 本学大学院博士課程)